

View from Down Under

文・ハイランド真理子

最近の豪州競馬の話題から

キャッツファンとD.オリバー騎手

オーストラリア競馬は、元日のパースの競馬から始まる。パースは、昨年の馬インフルエンザ・フリー地帯。更に、資源の豊富な地域で、世界的な資源ブームのせいか、経済もほぼバブルに近く、したがって、競馬もますます活気を帯びている。そのパースで、元日に開かれたのは、パースカップ。

今年、パース出身のダミアン・オリバー騎手が、本命馬キャッツファンで優勝して話題となったが、実はこのレースで、スタート直後、6頭が落馬するという事故があり、こちらも大きな話題だった。ダミアン・オリバー騎手の父はやはり騎手で、1975年に落馬事故で死亡、その後、兄のジェイソンも同様の事故で死亡しており、「何とか走りきってくれてほしかった」とオリバー騎手が語ったのは当然のことだった。一方で、「パースカップで何回か本命馬に騎乗しているが、これまではアンラッキーだった」と生まれ故郷でのカップレースの優勝に興奮気味。

オーストラリアには、各都市にカップレースと言われるレースがある。メルボルンカップも、最初は、単なるメルボルンのご当地カップレースであった。ダミアン・オリバー騎手は、メルボルンカップ、アデレードカップ、プリズベンカップ、ホバートカップに優勝している。今回のパースカップ優勝で、残るはシドニーカップ制覇のみである。

キャッツファンは、スプリンターでゴールドスリッパーを勝ったキャットバードの産駒。母の父は、優れたステイヤーを輩出するザビール。血統からいっても、多彩な距離をこなせると思っていたが、実際、WAダービー（G1）に優勝している。オーナーのジャーヴィス夫妻は、45年前にオーナーの一人としてパースカップを勝ってから、ずっと2回目のこの日を待っていたのだという。パースからは、これまで何頭かの傑出した馬が出ていた。ノーザリーもその一頭だし、昨年、コックスプレートこそ逃したもののマラスコも未来のチャンピオン馬候補。

また、かつてパースカップで2着になったローガンジョシュは、メルボルンカップで優勝しているし、このキャッツファンも、メルボルンカップに出走するに違いない。キャッツファンのサイアー、キャットバードは、デインヒルの息子でこれまで1200mから2400mまでの優勝馬を出し、リーディング初年度種牡馬になり、かなりの期待を集めていたが、残念なことに昨年6月に急死してしまった。

シドニーの話題

シドニーの話題は、新生クラウンロτζの行方である。オーストラリア最大の馬主、インガムファミリーが持っている厩舎で、長い間、ジョン・ホークス調教師がリーディングトレーナーとなり支えてきただけに、この行方は、オーストラリア競馬界全体に与える影響が大きい。昨年、ホークス調教師は、急に同厩舎と袂を分かち、その後、14年の間ホークス調教師のアシスタントトレーナーを務めてきた、ピーター・スノーデン師が厩舎を継いだ。ホークス調教師は、競馬の日に、競馬場に顔を出さないことで知られてきたので、何年もの間、代理で競馬場に来ていたこのスノーデン調教師の方が、競馬ファンの我々は、よく知っている。スノーデン調教師は、昨年11月29日に、ビクトリア州で初勝利を挙げているが、1月3日には、シドニーでも初勝利を挙げた。

昨年、馬インフルエンザの時に、経験者として引き出されたのが南アフリカ出身のデヴィッド・ペイン調教師だ。彼は、南アフリカのリーディングトレーナー。数年前にオーストラリアに移住して、ロイヤルランドイック競馬場にその厩舎をオープンし

た。その彼と、南アフリカ時代にコンビを組んでG1を20回も優勝したジェフ・ロイド騎手が、オーストラリアに移住、シドニーで騎乗を始めている。46歳ではあるが、6回も南アフリカのリーディングジョッキーを獲ったことのある大ベテラン。12月8日に初勝利を挙げ、更に勝ち星を重ねている。

馬インフルエンザの影響を最も受けたシドニーの競馬が、12月から開始された。私たちがマネジメントしていた馬たちもそうだったが、ロイヤルランドイック競馬場の厩舎に入りっぱなしで、ランドイックをベースにする馬たち600頭が全部馬インフルエンザに罹って、完治したところで、今度は全頭、休養に出された。休養中に消毒をするためであった。厩舎に入っている間、簡単なウォーキング運動はしていたものの、それまで準備されていたレース計画は、イチからやり直しとなった。中には、病状が重いケースもあったので、休養から戻ってきていない馬たちもまだいて、シドニーの競馬が完全に立ち直ったとは言いにくい。しかし、新年は、まず、ロイヤルランドイック競馬場でのG2ヴィラーズSで沸いた。

ヴィラーズSと テイクオーバーターゲット

馬インフルエンザで、コフスハーバーに立ち往生していたテイクオーバーターゲットだが、シドニーに来て、連勝していたから、競馬場は尚更沸いていた。テイクオーバーターゲットは、それまで61キロの重いハンデで2連勝しており、3連勝するのをぜひ見たいと、ファンが殺到した。ヴィラーズSは、1400mの距離。レース前、ジャーヴィス調教師は言った、「距離はあまり心配していない。心配なのはハンデだ」と……。その心配は当たってしまって、テイクオーバーターゲットは、首半分まで勝ったものの、2着にな



パースカップの優勝馬キャッツファン。
鞍上は、ダミアン・オリバー騎手

photo by Scott Hollands



ジョー・ジャニアク調教師と、ジェイ・フォード騎手。
(ヴィラズSのレース前)

Photo by Hyland Thoroughbred Services

ったオナーインウォーに乗ったヒュー・ボーマン騎手からの異議申し立てで、斜行のため、2着に降着となってしまう。ヴィラズSは、サマースプリントシリーズの3戦目で、勝てばシリーズを全勝優勝したところであった。

折角のパーティームードをジャマしてしまつてゴメンと言つたのは、異議申し立ての結果、優勝となったオナーインウォーのクリス・ワラー調教師。実際、降着が発表になったあとは、こぶしを突き上げて怒るファンたちがいた。審判を下した、レーシングNSWのレイ・マリヒー裁決委員長は、「パブリックエネミー(国民の敵)No.1.」になったと翌日の新聞に載った。異議申し立てで負けた後、ジャニアク調教師は、競馬場内のパブに向かう途中、群がるインタビューに「That's racing(それが、競馬さ)」と答えたと言われた。

勝ったオナーインウォーは、昨年コックスプレート参戦のためにアメリカからやってきたが、レース直前に危険薬物検出で出走取消となった。父はロードアットウォーで、現在9歳の牡馬。オーストラリアに来てすぐに、有名なシンジケートの会社に半分株を買われた。コックスプレートには、出られなかったのだが、アメリカのG1馬だったから、種牡馬として、クインズランド州の牧場に売却される。しかし、その後、売却のための支払いがされず、また、競走に戻ってきたのだという。パートオーナー(株主)

は、今回の優勝後に、「これでオナーインウォーは、アメリカのG1と、オーストラリアのG2を勝つたのだから、これからまた種牡馬としての価値が上がる」と言っていたらしい。ジャニアク調教師の言葉を借りれば、That's racing, too. 万事塞翁が馬?

さて、テイクオーバーターゲットは、この後、4月26日に、ロイヤルランドイック競馬場で開催されるG1レース、TJスミスステークス(1200m)に出走して、それから、シンガポールのクリスフライヤー・インターナショナルスプリントに出走後、6月のアスコット遠征に行く予定。8歳のグロブトロクター、今回が最後だというのだが、ちょっと惜しい気もする。

実現しなかったクラブの併合

言うまでもないかも知れないが、オーストラリアの競馬体系は、日本と異なっていて、競馬の主催者は、ジョッキークラブ(ターフクラブ、あるいはレーシングクラブ)と呼ばれるクラブ組織になっている。クラブは、当然ながらメンバーがいて、非営利団体になっている。したがって、利益が出れば、それはクラブ全体のために使われることになる。

ジョッキークラブには、メトロポリタンとプロビンスナル、そしてカントリーのステイタスがあるが、このメトロポリタンのジョッキークラブは、各州の州都に所在する。クインズランド州には、州都ブリスベンに、2つのジョッキークラブ、クインズランド・ターフクラブ(QTC)とブリスベン・ターフクラブ(BTC)があって、それぞれが所有するイーグルファート

ム競馬場とドンペン競馬場の二つの競馬場は道を挟んで並んで存在している。だから、その二つのジョッキークラブに合併の話が持ち上がったとしても不思議ではなかった。ただ、それぞれにメンバーがいるので、なかなか実現が難しく、特に、QTCよりも、歴史の新しいBTCのメンバーが、それを拒んできた。ところが、去年は、合併の話が急激に進展して、11月末に会員間の合併に関する投票が行われた。が……結果は、事前の噂と異なり、BTC側が72%の賛成票で、決定数の75%には至らず、合併が流れてしまったのだ。

はさて、この話は、新年もまだ続いていて、投票の結果を不服としてBTCの理事数人が辞任、また、投票結果に疑惑があると、クインズランド州の競馬管理母体が、企業の不正を監視する特別機関のASICに査問、および調査を依頼している。したがって、QTCとBTCの合併問題は、今年もまだ尾を引きそう。そうそう、参考までに。ジョッキークラブの合併問題は、競馬の世界に関与しているだけではない。もともと、二つの競馬場があるところは、ブリスベンの超一等地で、どちらかの競馬場が閉鎖になれば、何百億というお金と不動産が動くことになる。欲と権力。Is it racing?

相次ぐ訃報

去年は、オーストラリアの競馬界を代表するような競馬人が多数逝去した。中でもジム・フレミング氏は、オーストラリアを代表する競馬界の重鎮中の重鎮であった。フレミング氏は、長い間シドニー・ターフクラブ(STC)の理事を務め、更に10年近く会長職を務めた。ワンマンとして知られてはいたが、大変な実



ヴィラズS、ゴール前(手前が勝ち馬のオナーインウォー)

Photo by Hyland Thoroughbred Services

ヴィラズS、優勝馬のオナーインウォー
Photo by Hyland Thoroughbred Services